S級御曹司たちがゆく、異世界契約支配者生活

ルーラーズ・ライフ

明月千里

GA文庫

カバー・口絵　本文イラスト
蔓木鋼音

Starting world

S級御曹司の日常

時は十二月二十四日――初雪のクリスマスイヴ。
都内に存在する有名進学校蔵野高校のテニスコートで、それは起こっていた。
「やっちまえ敷島ァ！　全国覇者の力を見せてやれ！」
学校外でのいざこざから始まった、生徒間での対抗試合――。
幼い頃からプロに教わり、ジュニアランキングでもトップクラスである高校二年生の敷島は、わけもわからず打ちのめされていた。
「クソがッ！　だがこのサーブを返せるもんなら――なにぃッ……!?」
鍛え上げたビッグサーブが難なく、目にも留まらぬ速度で返される。
最初の数セットは見事に決まったものの、対戦相手である眼鏡の少年は即座に対応し、逆に強烈なリターンを放ってきた。
それで決着は付き、ゲームセット。
プライドをズタズタにされつつも、敷島は男に握手を求めた。
「悔しいが完敗だぜ……。全国じゃ見かけなかったが、名前は？　テニス歴は何年だ？」

悔しさを押し込めて微笑む敷島に、対手の少年はくいっと眼鏡のブリッジを押し上げる。
汗ひとつ浮かんでいない冷静な顔で、答えを告げた。
「大体十二回目くらいだな。学校の授業でしかやったことはない。俺の名は――御剣シンだ」
「なッ……!?」
絶句する敷島に背を向け、少年はゆっくりと歩き出す。
「じょ、冗談はよせ！　せ、せめて所属しているクラブくらい――」
驚愕と困惑、そして戦慄に身を震わせながら、それでも追い縋るように手を伸ばすと、蔵野高校の男子生徒に肩をつかまれ、それを止められた。
「悪いがその辺にしてやってくれ、アイツはまだ忙しいのさ。具体的に言うと、今日は三件の仕事だ。あんたの相手と、来られなくなった通訳の代理と、空手の助っ人がな」
「なんだと!?　じゃあ本当に、アイツはあの噂の――」
「ああ、聞いたことくらいあるだろ？　最高位の御曹司、御剣シン。ヤツの手にかかれば、大概のことはカタがついちまう。天才なんて言葉じゃ及びもつかない、現代の三強だ」

その五分後――場所は変わって、市役所。
「ど、どうしてそんな学生に通訳を任せるんですか!?　せっかく私が来れましたのに！」
理知的なスーツ姿の女性がくってかかるが、初老の市長はやんわりとかぶりを振る。

「悪いがもう彼に頼んでしまったのだよ。大丈夫だ、今回はこのために二週間も教室に通ってくれたそうだからね」
「に、二週間!?　難しいロシア語がそんな短期間で覚えられるはずないでしょう!?　最低六年は必要で、そもそも覚える要項が多くて、私も中学から勉強したのに――」
が、女性が声を上げるその傍らで、少年がペラペラと来客の通訳をこなす。
「え……？」と、困惑の表情を浮かべると、市長はぽんと女性の肩を叩く。
そして、やんわりと諭すような表情を作り、囁いた。
「君の努力を見くびっているわけじゃない。ただ、今回は運が良かっただけなんだ。彼が私の母校に通う生徒であったことと、スケジュールをとってもらえたことがね」
「……ッ!?」
驚嘆の表情で、女性は少年を見据える。
そこには何の淀みもなく高難易度の言語通訳を淡々とこなす、少年の顔が映っていた。

更にその三十分後――、街中の有名空手道場。
「ＨＡＨＡＨＡ、何のジョークだい神栄会ヨ！　道場の看板をかけた戦いに子供を出すとは、ヤケにでもなったのカ？」
白い道着を纏った空手家の弟子たちが見守る中、御剣シンが中央に立っている。

ワイシャツとズボン、ベストを身につけた引き締まったスタイルだが、道着に比べ、その動きは圧倒的に制限される。

対峙する男は、筋骨隆々の黒人。

他流試合をふっかけては看板と引き替えに金をせびっている凄腕の格闘家、ロバートだ。

対する道場の主である壮年の男は、強気な態度を崩さぬまま、男を睨んでいた。

「試合開始の合図はした。よそ見をしてやられたと言っても文句は聞かんぞ」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　こりゃ大笑いだ。世界大会にも出場した俺に手を出させて、殺人罪にしちまおうってハラか⁉　まあいい、せいぜい手加減して――ぐおえばッ⁉」

ドンッ！　と、いきなり対手の少年が放った中段突き一発で、ロバートは轟沈する。

油断しきっていたわけではなく、対応できる余裕は残していたつもりだったが、少年の突きをかわすどころか、初動さえ見えなかった。

挙げ句の果てに真顔の少年が告げたのは、恐るべき言葉だった。

「悪いな。手加減はしたつもりだったが。空手は以前、三時間ほど経験済みだったのでな」

「な、にィイ……⁉」

水月を的確に強打され、ロバートは立ち上がることもできない。

ただ、あまりに非現実なシンの言動から、その正体を把握して声を出した。

「で、では！　貴様が日本で噂の、あの御剣――⁉」

シンは返事もせず道場主――同級生の父親に一礼すると、そのまま踵を返して道場を出る。

待ちかまえていた黒塗りのハイヤーの前で、若い怜悧な顔つきのメイドが一礼した。

「お疲れ様でしたシン様、予定通りです」

「今夜は会食の予定だったな？　その前に一件予定があるので、あとで迎えを頼む」

後部座席に颯爽と座ると、車は走り出す。

知り合いからの頼み事は終わった。

『最高位の御曹司』御剣シンの本番の仕事が、これから始まるところだった。

十五分後――都内の一等地に存在する豪邸へと場所は移る。

「これがあの最高位の御曹司と呼ばれた、御剣シンの屋敷か……」

ＳＮＳのゲーム事業で成功した大企業役員である羽鳥猛は、門前で目を白黒させていた。

西洋の王宮にも似た馬鹿デカイその邸宅は、周囲を隔絶する高い外壁から敷地に至るまで入念に手入れがされ、整然と美しくそびえ立っている。

かつて落ち目の名家でしかなかった御剣家は、今や日本有数の大財閥へと返り咲いた。

それがまだ若干十六歳の少年の手腕によるものなどとは、世間はにわかに信じきれない。

しかし現実問題として、企業家たちは助言を求め、彼の元へ殺到している。

曰く、『究極の交渉人』。

曰く、『万能の代行役』。
曰く、『超級の指導者』。
更には『本気出す出す詐欺師』、『空気以外は読める男』、『ド畜生眼鏡』など、陰口の二つ名は様々だが、一貫しているのはただひとつ――。
彼がこの現代の切り札であるという一点のみ。
スポーツだろうと、勉学だろうと、あるいは芸術の類だろうと。
あらゆる分野で驚異的な成績を叩き出す異才の持ち主。
いわばこの時代における超人、『現代の三強』の一角であるということだけだ。
この手の仕事――経営戦略に関する大企業家たちへの相談事は、既に一日の隙間もなくスケジュールが埋まっている。
それほどまでにシンに相談を持ちかける政財界の人間が多いということだ。
（この話が本当であれば、私は恐るべき瞬間に立ち会うのだろう……）
役員の男――羽鳥が緊張と畏怖を込めて考えたそのとき、
「なッ……?!」
屋敷のラウンジに流れるクラシックのメロディを切り裂き、大音量の奇声が轟いた。

◇◇◇

「フラれたぁあああああああああ――ッ！」
絶叫が広い屋敷中に轟き、ガタガタと高級家具が震えまくる。
当主の奇行を察したメイドの女性が、ノックもそこそこに部屋に入り込んだ。
「お静かに願いますシン様。端的に言うとアホだと周りに思われます。――事実ですが」
「何故だ！　何故なんだぁあっ！　俺の完璧な計画が……！　くそがぁあッ！　ああ、俺の一度しかない十六歳のクリスマスイヴの予定がぁあああっ！」
が、侍女兼秘書の進言も聞き流し、少年はベッドの脇で悶絶している。
「どうしたのですか？　あなたの頭がおかしいのはいつものことですが、今日は一段とひどい――というか、逆立ちで腕立てしながら叫ばないでください。気色悪いです」
「ふざけるな畜生が！　お前らみんな畜生だ！　はぁっ、はあっ……！」
確かにその絵ヅラは極めて不気味だった。
上品な赤絨毯が敷き詰められたその寝室で、少年はシックなベストとズボンを身につけたまま、倒立していたのである。
それも右手の指三本のみでの腕立て伏せをしつつ、左手ではスマートフォンのパズルゲームの複雑な盤面をスラスラと解いている。
美しい面立ちの侍女。周防理世は呆れつつ、その無駄な体力に感嘆していた。

「また女の子にフラれたのですかシン様は、校内だとあなたの無茶苦茶さが伝わっておりますから、今度は他校の子を狙うと言っていましたが？」
「ああ、そうだが？」
ぜいぜいと息を荒らげたシンが、額に汗を滲ませて応える。
が、それは三本指倒立腕立ての疲労ではなく、単に失恋のショックで興奮しているだけだ。
人外じみた身体能力を持つこの少年にとって、この程度は体をいじめているうちに入らない。
縁なしのフレームの眼鏡の奥から、理知的とも獰猛ともつかない、強烈な意志を秘めた瞳が光っている。
「さすがにフラれ続けるのも二十五人目だ。今度という今度は万全を期したはずだった！」
「前回は確か、初デートで食事へ行った直後に別れ話を切り出されたそうですが？」
「困ったものだ。中華が好きだというから、銀座の最高級レストランで、満漢全席を頼んでおいたというのに……！」
「相手は初デートの女子高生ですよ？　相変わらずですね。このアホは」
「……何か言ったか⁉」
ぼそっと呟いた理世の一言に、シンは即座に反応する。
技術や身体能力だけでなく、五感すら超人めいているシンの弱点――。
そのレベルが高過ぎるが故に感覚もぶっとんでおり、他者がついて来られないのだ。

富裕層の子息が通う私立高校とはいえ、いきなりそんなもてなしを受ければドン引きする。
そんな普通がわからないのである。
「で、今回は何をミスったのですか？」
「わからん！　前回の件を反省して、今度は庶民的に大型ゲームセンターをデートの場に指定したのだ。彼女が気さくな性格であり、且つぬいぐるみ好きという情報を事前に入手し、クレーンゲームが多めのところを選んだのだ！」
倒立腕立てを続けながら言うシンに、理世は首を傾げ、
「シン様にしては、珍しくまともですね」
「だろう？　そして俺はワンコインでとある筐体のぬいぐるみを見事ゲットしたのに――」
「五百円で目当てのぬいぐるみが取れたのであれば、ほぼ最良の成果だと思いますが」
ここまでは、さすがに理世も不思議に思う。
が、次のシンの一言が、その認識をぶち破った。
「ん？　お前は何を言っている？　俺がワンコインで取ったのは、ひとつのクレーンゲームの筐体に入っていたぬいぐるみ全てだ」
「……は？」
理世が冷静沈着な侍女の顔を崩し、ぽかんと口をあける。
ひとつのボックスには、数十個のぬいぐるみがひしめいているはず。

それを、たった五回クレーンを操作しただけで全て攫ったという事実を、理世はとっさに理解できなかったのだ。

シンはそのときの引きつっていた彼女の表情を思い出す。

クレーンゲーム五回でゲットした山盛りのぬいぐるみの前で、別れ話を切り出した彼女を。

『後学のために理由を聞かせてもらえるか？　俺の何が悪かったのだ？』

正直泣きたかったが、御曹司たるもの取り乱してはいけない。

シンはあくまでも平静を装って尋ねたが、対する少女は複雑な表情のまま、率直に答えた。

『いや、何が悪いってわけでもないんだけど……その、御剣君ってやっぱり、私たちとは住む世界が違うっていうか、正直同じ人間ですらないっていうか――』

それが、決定的な破局だった。

「ぐおおおおッ！　せっかく今日に向けて、いろんな予定を立てていたというのに……！」

「では、そろそろご支度を。シン様の空いた時間に、急遽新たな仕事を入れましたので」

「貴様は鬼かッ⁉　傷心の俺を働かせるんじゃない！」

御剣シンを相談役として求め、力を借りようとする企業家たちは後を絶たない。

社会に出たこともない高校生の助言を各界が賜う――笑い話のような話だが、現実問題それが起こり続けると、噂を隠しきれぬほどの大事になった。

自らの家を有数の財閥へとのし上がらせたシンの手腕に惚れ込み、現役の高校生でありながら、企業顧問への勧誘が押し寄せている。

「本日の仕事内容は、羽鳥様による天来堂取締役との会食の同席となっておりますが――」

「接待は気が進まんが仕方ない。ここのメーカーには世話になっているからな」

と、シンは立ち上がり、スマートフォンでプレイしていたソーシャルパズルゲーム、『パズル&ファンタジー』を見る。

『セルティア』という名の人気キャラクターのクリスマスイベントのイラストが、『もうすぐクリスマスですね！』という笑顔とともに、そこに存在していた。

「ふう……。やはり俺の心を癒してくれるのは彼女だけだ……。早く彼女からの愛のプレゼントが届かんものか」

「あなたが廃課金で予約したプレゼントはいいですから、部屋を出てください。もう迎えが来ています」

「相変わらず冷たい女だ。これで完全無欠のスーパーメイドなどと呼ばれているとは、世間の認識の不確かさが窺えるというものだ」

「では認識を改めて頂けるよう優秀なところを見せましょう。――とっとと降りないと蹴り飛ばしますよアホ」

そんな普段通りのやりとりをしつつも、テキパキと支度を整える。

聖夜の仕事が、始まった。

◇ ◇ ◇

四時間後――相談と接待の仕事を終えた御剣シンは、理世とともに帰路についていた。
黒塗りのハイヤーの中、深夜でも明るい都会の夜景が窓の外で流れてゆく。
「クリスマスだというのに、世間は相変わらず彼女一色ですね」
「ああ」
理世の言葉にシンは片手でスマホをいじりつつ、素っ気なく応える。
大型の街頭テレビに映し出されているライブ中の少女の名は、『帝ノ凛紅』。
十五歳のアイドルにして、歌手、声優、女優、作詞作曲にイラスト、どこまで本当かは知らないが、舞台演出までもこなすというスーパーアーティストだ。
楽曲の売り上げやコンサートへの観客動員数も異例の数字を叩き出し、御剣シンやもうひとりと並び、最も金を稼いでいると呼ばれている十代の少女。
それだけでも前代未聞の偉業であるのに、またその正体が異常だ。
帝ノ――というのは、かつてこの国を従えてきたという帝家の名字だ。
言わば世間から存在を隠され生き延びてきた古い貴族の家系。
そんな彼女が表に出てきたのも、彼女自身の望みによるものだというのだ。

隔絶された世界で生きてきた深窓の令嬢が、自らの意志で羽ばたいた。
それが作られた美談などでないことは、彼女の芸能での多才が証明している。
その一方、車内で流れているニュースでは、日本に進出していた海外有名マフィアの首領が、暗殺されたという事件が報道されている。
「先日の事件ですか。警察すら迂闊に手を出せないものを、これも枢木家の仕業ですかね」
「可能性は高いだろうな」
再び理世の言葉にシンは頷く。
枢木家は、大昔から日本に存在する、裏仕事を生業とする一族だ。
暗殺、諜報、そして裏工作など、違法の仕事を高額で請け負う彼らは紛れもない犯罪者でありながら、一度もその身柄を抑えられたことはない超人の集団。
中でも歴代最高の実力を備えるという少女は、まだ若干十四歳の少女――枢木冥夢という噂がある。
御剣シン。
枢木冥夢。
帝ノ凛紅。
この三名が、個人でほぼ最高の成功を収め、誰よりも稼いでいると呼ばれる十代。
億万長者にして、『現代の三強』と呼ばれる少年少女たちだった。

「それで――今月の収支報告について、我が父上はなんと？」
ふいに話題が途切れたときにシンが尋ねると、侍女の理世は微かに口籠もる。
「シン様のご活躍を褒め称えております。是非このまま、仕事の幅を増やしてほしいと」
「それだけか？」
「もう自分が口を出すことはないと。資産運用などの仕事は全面的に任せると――」
「それだけか？」
「ご不満があるのですか？　御剣家も安泰です。政財界からも多くの声がかかっております」
スマホをベストのポケットにしまい、シンは俯く。
そのまましばし沈黙をした後、月のない夜空を窓から見上げる。
「俺はいずれ、この国をしょって立てると思うか？　御剣家だけでなく、この国全ての人々の指導者として」
十六歳の少年の言葉とは思えない一声。
だが、シンの実力を知る理世は、頷くしかできなかった。
「ええ。あなたが望めば、きっと遠からぬうちに」
「だが俺は、それを望まない」
淡々と素っ気なく、御剣シンは本音を吐く。
「俺はもう、この世界に興味がない。この世界は本気で戦う価値はない。誰かを助ける意味も

ない、何かを正そうとも思わない」
「……童貞の分際で何悟ったようなこと言ってるんですか？」
「いや、俺は気づいた。この世界で俺が望むものは――って黙れ貴様ァア！　人が感傷に浸っているときに！」
「あなたの感傷なんて所詮そんなものです。自分の立場をお忘れなく」
「そうだな」
理世の一言に頷き、シンは視線を前に戻す。
彼女の言葉には、ある種の含みが存在した。
十年前に、シンが屋敷に来たときからいた理世だからこそ知る、裏を。
（どうなのだろうな、俺は）
赤信号で停まった際、街頭のＴＶ映像を見つめながらシンは思う。
そこには、絶世のアイドルと呼ばれる帝ノ凛紅が、楽しそうにステージ上でステップを踏んでいる姿が映る。
彼女が自称する特技は『占い』。
百発百中を謳うその都市伝説じみた彼女の助言を、シンは一度だけ受けたことがある。
『悪役になりなさい――あんたはきっと、それ以外の生き方なんてできやしないわ』
外面用の笑顔ではなく、小悪魔のような笑みをシンに向け、凛紅はそんなことを言っていた。

一年前の当時は意味がわからなかったが、今は少しわかるような気がする。
そして、同じく二年前に死闘を繰り広げた、枢木冥夢。
あのときは初めて、自分の命の危機を感じた。
（全てを手に入れた彼女たちは、何を思っているのだろうか？）
シンが柄にもなく、他者に思いを馳せたそのとき、
「――!?」
――ブツン。と、不意打ちのように、突如世界が静止した。
繁華街を照らすネオンの光が失せ、辺りは闇に包まれる。
強い吹雪の音だけが聞こえる中で、直後――轟音と稲光が網膜を焼いた。
「……ッ！　都内の街中で雷雪だと？」
あまりに不可解な現象に、さすがのシンも眉を顰めて警戒する。
落雷も車内であればアースにより防げるはずだが、通常の天候とは明らかに違う。
「理世！　俺の声が聞こえるか!?　うちの警備会社に緊急連絡を入れろ！」
シンは反射的に指示を出すが、もはや五感そのものが消え失せる。
「一体、何が今起きている？　これは――ぐッ、う！」
同時に右腕の手首に焼け付くような痛みを覚える。
そして数秒後、この世界の生ける伝説のひとりは、世界から消失した。

STAGE 1

世界漂流・オーバードガイア

（ああ、またこれか――）
遠い意識の中、御剣シンは夢を見ている。
幼い頃、まだ御剣家に養子として引き取られる直前の光景。
乱気流による飛行機事故がおき、四百人中、僅か生き残った七人の中にシンはいた。
自分を庇うように死んでいたのは、遠い親戚の養父母。
既に齢六十を超える夫婦ではあったが、優しく気さくで、実の息子のように接してくれた。
だが、シンはわからない。
何故実の両親が自分を捨てたのか、何故養父母は親身に接してくれたのか。
自分は恩義を返せたのか。
最後までそれが理解できずに、あれから十年が過ぎていた。

◇　◇　◇

吹雪が舞う高い空の下。
ズズズッ、と降り積もった雪の表面を、ずんぐりとした体格の髭面の男――土精種のひとりが、少年を引きずっている。
雪に埋まっていた謎の男を引っ張り出した土精種は、音を聞きつけてやってきた他の同族に声をかけられた。
「お前さん。仕事さほったらかして何してんだべ？　ただでさえ人手が足りてねんだぞ？　今年の防衛費を稼げなかったら、集落の守りはどうなっちまうことか――」
見た目がほぼ全く同じもうひとりの土精種が、怒ったようにくってかかる。
が、その引きずっているものを見て、思わず息を呑んだ。
「こいつは――、雑種だべか？」
「ああ、数ヶ月ぶりに流されて来たらしいが、おそらくもう死んでるべさ。ほっどいたらモンスターに食い散らかされちまうがら、使えるもんでも持ってねがと思ってな」
少年を発見した土精種は死体を引きずり、ねぐらへと帰る途中だったのだ。
が、彼の仲間はそれを理解した上で眉を顰め、言った。
「お前さんはアホか？　死んどるもんを持って帰ってどする？　ここで身ぐるみ剝げば手間が省けるべさ」
「……おお、それはそだなぁ」

あっさり頷き、少年を抱えていた土精種は手を離す。
そして、雪の上にその身体を転がすと、着ている服に手をかけた。
「『はぐれ人』の服は、相変わらず脱がしにくいべなぁ」
「我慢すっぺ。高く売れそうなもんがあるかもしれん」
毛むくじゃらの土精種二人は、愚痴をこぼしつつシンの下半身をまさぐる。
ベルトを解けば脱がしやすいことを、二人は既に知っていた。
が、このとき二つのミスを彼らは犯していた。
ひとつは行き倒れの少年――御剣シンがまだ生きていたこと。
そしてもうひとつは、その匂いを嗅ぎつけた捕食者の存在に、気づくのが遅れたことだ。
「グロロロロロロロロロ……！」
喉を震わせる微かな低音が、雪上に響く。
「まずいべ！　森の主が来た！」
「うあああッ！　急いで家に逃げるべ！」
自らを脅かすモンスターの気配を察した土精種は、その短い足で一目散に逃走する。
直後、行き倒れていたシンの意識が、その騒ぎに反応した。
「ん、んん……寒いな、まったく理世め。あれほど暖房を入れておけと――ッ!?」
目覚めたシンは、一瞬呆けた直後、素早く現状を把握する。

眼前の数メートル先に、熊がいた。
それも、何かを間違えたとしか思えないサイズ――体長六メートル級の怪物だ。
日本に存在する生き物ではない。
そう瞬時に察したのは、その口蓋から日本刀のように長く鋭い牙が伸びていたからだ。
まるで絶滅したサーベルタイガーの熊版を、更にふた回り巨大化させたような――。
「……ふっ、ざけるなあああっ！」
いかに人間離れしたシンとはいえ、大型の猛獣に素手では勝てない。
雪山の斜面を滑るように逃走を開始する。
百メートルを世界記録並の速さで走れると豪語しているが、この熊はそれ以上に速い。
途中に存在する大木が、猛獣の腕のひと振りで次々と吹き飛ぶ。
シンは振り切れないと見るや、川を見つけて崖から飛び降りた。
着水まで数秒。下が水とはいえ、高所からの衝撃も凄まじいダメージだが、視界の端に存在した怪鳥を見て、思わず自分の目を疑う。
「何だアレは!?　ここは一体なんなんだ!?」
更には、水色のぷっくりとしたジェル状の球体――巨大なスライムのような化け物までが、立ちはだかり、自分を呑み込もうと襲いかかってきた。
川に潜ってそれをかわし何とか這い上がるも、ずぶ濡れの全身が凍り付き始める。

「ぐッ……！　さっきからおかしいと思ったが、ここはマイナス何℃だ⁉　このままでは死ぬ……！　何とかして暖を取らねば！」
ガタガタと歯を鳴らし、怪物の襲撃を警戒しつつも、シンは生存を諦めない。
「川沿いだ……。川沿いを行くしかない。運がよければ民家があるはずだ！」
この雪原で火を熾（おこ）している余裕はないし、うかつに煙を出せば怪物を呼び寄せる。
即座にそう判断し、腕時計で時刻を見ようとする。
が、右手首につけていた数百万相当の腕時計は逃走の際に外れており、代わりに――奇妙な物が存在していた。
「火傷（やけど）――？　いや、入れ墨（タトゥー）か何かか？」
手首を巻くように刻まれた記号と文字。
見慣れぬその模様が僅かに気になったが、すぐにかぶりを振って意識を現実に向ける。
この気温ではもう数分も生きられない。
絶望がシンの脳裏を過ぎったとき、一筋の光が差した。
「……あったぞ！　ヒトの家らしきモノが！」
どこか古くさい作りだが、赤い煉瓦（れんが）と木で造られた家がある。
周囲にはほとんど家がないものの、小さな畑やいくらかの家畜小屋も見えた。
張り巡らされたロープのバリケードをくぐり、シンは急いで家屋のドアを開ける。

いくつかの部屋に分けられたその扉を片っ端から開けると、無人だった。
「誰か！　誰かいないのかッ！」
空き屋に来てしまったのかと思ったが、幸いなことに燃えさかる暖炉を居間で見つける。
「仕方あるまい。少し借りさせてもらうとしよう」
許可なく使うのも気が引けるが、ぶっちゃけ死の際なので他に選択肢はない。
パリパリに凍り付いた衣服を脱ぎ捨て、暖炉の傍で熱気を浴びる。
かろうじて命を拾ったことで、ようやく物事を考える余裕ができた。
「しかし、この場所はなんだ？　本当に地球上なのか？」
都内の冬とは比較にならない豪雪の地帯。
気温も体感で氷点下に至っており、大気も薄い。身体もやや重い。
加えて、自分に襲いかかってきた怪物の存在から、ここがまともな世界ではないとシンは認識していた。
「大熊や怪鳥であればまだ、かろうじて言い訳もつくが、ＲＰＧのお約束までいるとはな」
あのスライムのような化け物は、さすがに幻覚でもなければ説明がつかない。
あのとき車内で起きた奇妙な暗転。
信じ難い話ではあるが、自分が異世界へ迷い込んだようにしか思えない。
「となると――ここの住人も通常のヒトではないかもしれんな」

ファンタジーでよく聞く亜人の類か、あるいは人間とも似つかない異種族か。
最低でも言語の違いはあるだろう。
いずれにせよ、彼らと敵対せずに済むよう、何らかの策を考えておくべきだ。
驚天動地の事態にもかかわらず、御曹司のシンは冷静に観察する。
居間のソファー、クローゼット、テーブル、キッチン、皿。
全てのものが中世時代のレベルの品質だが、構造や大きさから察するに、おそらくこの家の住人はヒトと大差ない姿をしているはず。
これは喜ぶべき判断材料だとシンは見極める、が。
「住人が見当たらないとはいえ、いつまでもこの格好というもの問題だな……」
何せ今は、一糸まとわぬ全裸なのだ。
服が乾ききるまでには、まだ時間がかかりそうだ。
「ふむ。ならば服も少し借りさせてもらうか」
呟きつつ、シンは近くのチェストを開けてみる。
そこには常人の神経であれば、慌てて閉じるであろうものがいっぱいにあった。
若い婦女子が身につけそうな、薄く小さな色とりどりの下着が――、
（――と、普通の人間ならば驚いて固まってしまうだろうな）
だが、シンは動じず『最高位の御曹司』として、この状況下に見合った考察をする。

衣類ひとつでも、調べればその文明の科学力や技術、風習と文化などの情報が得られる。
そう思い純白のパンツを両手で広げ、まじまじと観察する。
生地の縫い目から、クロッチ部分の素材を指でなぞってみた。
「なるほど、素材はシルクか。時代的にはどうかは知らんが、技術的には中世よりは上のようだな。ついでにこれを身につけている生物の形状もわかる。おそらくは二足歩行のほ乳類で。それも少女の――……ッ!?」
ガタン。と、いきなり聞こえたドアの開く音に驚き、シンは振り返る。
そこに今まさに想定した通り、ひとりの少女が立っていた。
「――――」
現れたのは、ひと目で人外と察することのできる相貌。
髪に隠された両耳からはアクセサリーにも見える、小さな角らしきものがついている。
露出が多いウェイトレスのような白と黒のブラウスやスカートは、彼女の愛らしさを引き立たせるように、フリルや赤リボンで飾られている。
――美しい。と、シンは思わず息を呑んで見惚れてしまう。
幻想的な薄ピンク色の長い髪も、ブラウスを押し上げるぱつんとした胸の膨らみも、燃えるような黄金色の瞳も。全てが一体となって、シンの情動を揺さぶった。
似ている。

フラれ続けたシンが心の拠り処にしていたゲームの少女――『セルティア』に。
「ッ……!?」
ビクッと表情を強張らせて、眼前の少女は困惑した様子で固まる。
（そうか、この世界にも羞恥心があるかもしれんな）
現在のシンは、身体を乾かすために裸だったのだ。
更には部屋のチェストを勝手に開け、取り出した住人の下着を手にしている。
このままでは、悪い方向へ誤解されかねない。
第一声で印象が決まる。
仮にこの世界がシンの世界に通じていることも考え、それを口にした。
「Calm down（落ち着け）. I'm not doubtful（私は怪しい者ではない）.」
少女の前に一歩を踏み出し、シンはそう流暢（りゅうちょう）な英語で告げる。
目と目が合い、数秒の沈黙が訪れた直後。

「――――変態ですぅぅぅぅぅぅッ……！」

「ぐはぁぁぁッ!?」
彼女が持っていた鞄が振り回され、シンが後方に飛び退いた瞬間、後頭部を壁に強打する。

脳震盪（のうしんとう）により、地面がぐらぐらと安定をなくす。
「日本語が通じるではないかッ……!?」
そんなことを呟きつつ、シンは床へと倒れ込む。
少女の涙目を見つめながら、そっと意識を手放した。

続きは、GA文庫8月新刊「S級御曹司たちがゆく、異世界契約支配者生活（ルーラーズ・ライフ）」で！